

浅草喜劇人銘々伝

3

西条 昇

江戸川大学教授・喜劇史研究家

『曾我廼家五郎篇』

そがのやごいちろう
エノケン登場以前に〈浅草の喜劇王〉と言われた曾我廼家五郎には四半世紀近くにわたって競い合ったライバルがいた。曾我廼家五郎（初代）である。全国的には、当たり役『ノンキナトウサン』が映画化された五郎ほどの知名度はなかったが、大正から昭和初期にかけての浅草六区では知らぬ者のない大きな名前であった。

本名は谷光逸雄。明治12年12月1日、香川県綾歌郡で生まれる。新派劇の福井茂兵衛に弟子入りして高槻新之助と名乗り、同じ一座に居たのちの五郎と出会っている。その後、日本劇団という一座を作り、地方を回っていたが、明治43年に東京で旗揚げされた旧知の五郎の一座に参加。曾我廼家メ太を名乗って、五郎の片腕的な存在となる。

明治45年に浅草・帝国館に出演した五郎一座は根岸興行部に引き抜かれて浅草・吾妻倶楽部へ。それを帝国館が引き戻すと、根岸側は五郎らを奪い返して浅草・常盤座に出演させた。この時にメ太は帝国館に残り、本家の曾我廼家五郎から五郎の名前を貰って自らの一座を立ち上げ

者まで居た。

五郎とは一座分裂以来、互いを強く意識し合っていたに違いない。五郎が知り合いの演劇記者に口をすべらせて五郎をこき下ろすと、それがそのまま記事になってしまい、怒った五郎が金龍館の五郎の楽屋に乗り込んで謝罪させるという一幕もあった。

二代目五郎は初代の芸風について〈芸幅は広く殊に愁嘆の場を得意とし、自然な演技で笑いと涙を誘うのが巧かった〉と語っている（向井爽也『につぼん民衆演劇史』）。

時流に敏感な五郎が五郎による教訓性の強い人情喜劇路線からいち早く脱して独自の五郎喜劇を作り上げたのに対し、五郎は終始、新派と五郎劇を基調とした。曾我



〈喜劇王〉五郎(右)と〈笑の王者〉五郎(左)が約24年ぶりに共演を果たした浅草・金龍館の昭和12年3月興行のプログラムより。(筆者提供)



一座結成1周年を浅草・世界館で迎えた五郎の大正3年の挨拶葉書。(筆者提供)

ている。大正2年7月に帝国館と同じ大瀧勝三郎の経営する浅草・世界館に移ると、昭和5年に劇場が取り壊されるまで常打ちを続け、浅草の三友館、江川劇場へと移った。同11年9月から翌春にかけて浅草・金龍館で五郎と約24年ぶりに共演。同13年7月から浅草・萬成座に出演した。五郎は、江川劇場や浅草・オペラ館、新宿パリー劇場、板橋大都劇場を入手するなど経営の才覚もあり、浅草田島町(現在の西浅草2丁目)の八幡神社の向かいにあった五郎アパートも経営した。このアパートの2階の一室を昭和13年4月頃から仕事場として借りた高見順は、ここで浅草を舞台にした小説『如何なる星の下に』を書いている。手を広げ過ぎて失敗した五郎は戦時中に役者を引退。昭和33年5月13日に大阪で没した。一座に居たメ太郎が同21年に二代目五郎を襲名している。

曾我廼家系列の役者の名は五郎の「五」や十郎の「十」、その他の数字、「郎」の字、五郎の紋である揚羽蝶にちなんだ「蝶」の字を入れたものが多いのだが、五郎一座にはライオン、ポスト、かば、やせ馬、おでこ、Sといった珍名が多く、中には付けも付けたり曾我廼家うんこという役

廼家において、五郎が〈革新派〉なら五郎は〈保守派〉であった。当時の五郎劇のプログラムには〈新派悲喜劇〉〈新派喜劇〉〈時代人情劇〉と銘打った出し物が散見され、五郎の書いた作品の上演も多かった。五郎は五郎の東上公演の度に四斗樽を差し入れて、台本の上演許可を貰っていたという。五郎の東上公演は新橋演舞場が中心で浅草には出なかったから、浅草の観客は五郎を通じて涙と笑いの人情喜劇を楽しんでいたのだ。

* 34頁の写真も併せてお楽しみ下さい。

西条昇の浅草喜劇コレクション

曾我廼家五郎篇

西条昇の所蔵資料の一部を本文ページ (P12-13) と併せてお楽しみ下さい。



昭和7年4月の浅草・江川劇場での五郎劇のプログラム。レヴェー金春舞踊團も出演。



昭和4年4月の浅草・世界館での五郎劇のプログラム。



昭和5年6月の浅草・三友館での五郎劇のプログラム。三友館は現在の浅草演芸ホール場所にあった。



《笑と涙の親玉》五郎一座が昭和16年6月に出演した浅草・萬成座のプログラム。



五郎の経営する浅草田島町のアパートの一室を高見順が借りて執筆した小説『如何なる星の下に』の初版本（昭和15年4月刊行）。

西条昇 江戸川大学教授、喜劇史研究者。

昭和39年、東京・飯田橋生まれ。幼少期より浅草をはじめとする都内の劇場や寄席で喜劇と演芸を観て育つ。新聞・雑誌への連載やTV・ラジオ出演も多数。主な著書に『ニッポンの爆笑王100』『笑伝・三波伸介』など。

